目立たず、騒がず、慎ましく。

mmｋ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目立たず、騒がず、慎ましく。

【Ｎコード】
Ｎ１９８６Ｚ

【作者名】
ｍｍｋ

【あらすじ】
転生した先がいろいろと問題ある場所だったけど、平成の知識がチートに変わってくれたのでそこそこ平和に生きていたはずの女の子に事件が起こってしまう話。
ちょっと暗いかもしれません。

【1】

［1］

「忘れないよ」

白いワンピースに身を包んだ幼いわたしは、目の前に立つ男の子に告げる。

貧しい村の貧しい家庭に生まれたわたしに、両親が買い与えてくれたそのワンピースは地味で楚々とした趣でわたしの一番のお気に入りだった。その一張羅を身にまとったわたしは、幼馴染の男の子を見る。

この子は、生贄なのだと。

そうわたしは思う。今でも思っている。それを引きとめられる訳もなく、最後の別れと、わたしは彼の姿を目に焼き付けるのに必死だった。

貧しい村の、とびきり弱い子だった。手も足も細く、気も弱い。一つ私よりも年上なのに、いつもわたしの後ろに付いて回って、目が合うと小さく笑ってくれる幼馴染の男の子。

その子は、驚いたように目を見開いた。引っ込み思案な少年は顔を真っ赤にして小さく頷いてくれる。それを見てわたしは嬉しくなったのを覚えている。

「僕も、……忘れないよ」

蚊の鳴くような。弱々しいけど、彼にしてみればそれははっきり

とした意思表示で。年甲斐もなくちょっと嬉しかったりもした。
わたしが、子供の頃の思い出だ。

わたしは、勉強は普通程度に出来た。これといった才能はなく、平々凡々の極一般人というやつだ。
かといって大きすぎる夢を持ったわけでもなく、自分の持った能力に見合った程度の人生設計を描いて、ちょっとゆとりのある老後生活を送れればいいな程度の夢だ。
だから、特別勉強を頑張ったとか運動を頑張ったとか。そういう事実は全くない。

そのわたしから見ても、この世界はおかしいと言い切れる。

カルセドニーという世界には、魔族と呼ばれるけったいな存在が居る。
魔族とは人間と違い、産まれた時から大人だそうだ。そして現在人間とは友好的なようで敵対関係にある。この辺は追々説明していこう。
人類の進化の過程で魔族のような摩訶不思議な生命体が出来上がった可能性だって否定できない。何より決定的だったのは、この世界の人間は例外なく、特殊能力が２つあるのだ！
１つは、先天性属性と呼ばれる。
それは、産まれた時から火、水、風、雷の４種類から１つ持つらしい。能力の強さは遺伝性もあるようだが、火属性であれば手の平

に火を出すぐらいの事は誰でもできる。
その事実を知った時は、けったいな場所に来てしまった程度の認識だった。それよりも自分も何かしらの能力を扱える事実の方が心が躍ったものだ。
……その後、落ち込む羽目になるのだけれど。

とにかく、魔法のようなものが使えるのだとワクワクしていたわたしに、両親は微妙に視線を逸らしながらわたしの先天性属性を教えてくれた。

いわく、雷。

いいじゃない。雷強そうじゃないと思われるかもしれない。しかし、わたしは貧しい農村に産まれた村娘。何を相手に雷魔法を使えというのか。
もちろん、魔族は存在するのだが、彼らはむやみやたらに人間を襲ったりはしない。
なぜなら魔族は戦闘狂なのだ。
強い人間と戦う事を楽しみとしている特殊な戦闘民族とも言える。だから、冒険者と呼ばれる戦闘のエキスパート以外とは積極的に争おうとはしない。人間は魔族と比べてひ弱で非力で、つついただけで死んでしまうからだ。

殺傷能力にしか秀でていないそれは、冒険者ならばまだしも使い道もあろうが……、村で畑を耕しながら長閑に暮らす人生において雷属性とは、イコール無能　なのだ。

「え～と、これは……あぁ、食欲増進ね」

見慣れた山の中で、わたしは一心不乱に生い茂る葉を摘む。青い筋が入った細長い葉は、あまり美味しくない葉で、私以外は誰も採取しないだろう。しかし、鑑定すれば分かる。それは胃腸の調子を整えて食欲を戻してくれる貴重な葉なのだ。

「あっちは……、利尿作用かぁ。ちょっとだけ摘んでいこう。あれだけ群生してるし、また取りに来ればいっか……」

先天性属性では大きく予想を裏切られたが、２つ目の特殊能力がここまで役に立つものだと思わなかった。

雷属性という役立たずな能力を持って生まれたわたしが、しかし村では救世主の如く崇められている。

それは、無能のレッテルを張られたわたしの必死の勉強のお陰もあるけれど。大きくはこの”鑑定”のお陰だ。

正式名称は無いらしく、ただ他の人は当たり前のように使っているのだけれど。わたしにとっては衝撃的だ。なにせちょっと目を凝らせば、目の前にあるものがなんなのか分かってしまうスペシャル能力なのだから。

しかし、このスペシャル能力は万能ではない。

実は、個人の知識力に応じた答えの範囲でしか分からないのだ。

村に産まれた子は足し算も引き算も、挙句には文字すら分からないまま一生を終える程度の教育なのだ。むしろ教育とは呼べないだろう。

故に、他の人が使った鑑定は「食べられる」と「食べられない」のどちらかの答えしか戻ってこない。その程度の知識しかないとい

う事だ。

しかし、わたしは産まれた時からこの世界の尺では十分すぎる知識がある。

わたしの村には、医者が居ない。

そもそも、医者という存在自体がいないのだ。

この世界は人間だけでなく植物にも不思議な能力が備わっているようで、薬草同士を調合すれば、寿命を延ばすことや、重体、重症以外であれば直せる薬が出来上がるようで、そういう薬を作りだす人が言わば医者のようなものなのだが。

そのような人たちは特別な教育を受けた人たちだけ。その中で、師匠から弟子へ受け継がれるものの様で酷く排他的。

貧しい村であればそんな特別な教育を受けた人たちへ、十分なお礼なんか出来るわけがない。

結果、医者は貴族や王族や、金持ちの持ち物のようなものになっている。

その医者の役目を、村ではわたしが担っているのだ。

天を突くように聳えるビル群に囲まれたあの世界に産まれ、育ったわたしは、科学が溢れる生活に十二分に適応し、またそれを便利

と思いながら謳歌していたわけだが。
きちんと義務教育を終えて、流されるまま高校へ進学。大学は……たぶん卒業したと思う。その辺りから記憶が曖昧だ。しかしいろんな知識だけはちゃんと持っている。その記憶だけは薄れることは無くはっきりと思い出せるのが不思議だと思う。
どういう理由で死んでしまったのか、いまいち思い出せないのだが。わたしはどうも死んだらしい。
そのまま記憶を持ったまま、次の生へ送り出されたようで、神さまがわたしの記憶を消し忘れたんだろうか？
なにはともあれ嬉しい誤算である事は確か。有り難く頂戴しよう。

しかし、生まれ変わったら別の世界でした。とは。誰が予想できるだろう。

【2】

［2］

いつ見ても、わたしの村は貧しい。
閑散としていて、あぜ道の様に伸びる主要道路は寒々しいことこの上ない。
どの旅人が見ても「貧しい村だ」と言うだろう。
しかし、そんな事実は全くない。

「おや、ムーンじゃないか。薬草摘みに行ってたんだね、お疲れ。どうだい？うちの新しいパン、食べてみないかい？干した果物入れてみたんだよ。甘いから疲れも取れるってもんだよ」

「もちろん喜んで頂きます！」

道の脇に店を構えるパン屋のおばさんが相変わらず元気いっぱいに焼きたてのパンをわたしに差し出す。お金はいらないという事なのでお言葉に甘えよう。
口に含めば、広がる小麦のいい香りとほのかに果物の甘い味。

「美味しいです！これ、ブドウですか？」

「そうさね。ムーンが言ったように果物を干してみたんだよ。そしたら美味いじゃないか。

まったく、どこでそんな知恵を付けてきたんだかね」

ブドウは、野草を摘んでいた時に発見したものだ。それを持ちかえって栽培したのをパン屋のおばさんにも分けた。干しブドウのパンが食べたかったからだという理由が全てではないが、大きくはその通り。菓子パンとか嗜んだっていいじゃないか。カルセドニーのパンは堅いのが主流で困る。

紫色の皮に包まれた薄い黄色の実という見るからにブドウというそれは、ブドウという果物と言う訳ではない。たぶん都市へ行けば別の名前が存在するのだろうけど、わたしはその知識は無いので鑑定した結果ブドウもどきと分かったのでブドウと呼んでいる。すると村にもその名前で定着してしまった。後での修正が面倒くさそうだと思うけど、わざわざ都市へ行って調べようとは思わない。

おばさんは笑いながらわたしの頭を乱暴に掻き混ぜる。本人は撫でているつもりなのだろうが、日々小麦を練るという作業と対峙している彼女の腕力はわたしの数倍に当たるんじゃないかと思う。毛根が悲鳴を上げている！

「いたい！いたいっ！本当痛いんで勘弁してくださいっ！
あ、そうだ。おじさん用の薬出来てるんで後で取りに来てくれますか？」

「あぁ、例のキンニクツウって奴かい？……まったく、うちのにも困ったもんだよ。
山に遊びで登って足を痛めてりゃ世話ないね。死ぬようなもんじゃないってのに薬を使うだなんて贅沢だよ」

「良いじゃないですか。元は無料ですもん。その辺に生えてる草で出来るお手軽薬ですよ。

足に塗って、その上から布で巻くんですけど。……ちょっと布が汚れちゃうのが問題ですよね」

何度改良しても、筋肉痛の薬は塗り薬になってしまうのだ。確かに、わたしの知識の中にも飲む筋肉痛の薬とは存在しなかったような気がする。というかシップの印象が強いんだけど。……だから改良しても無駄なのかもしれない。

「いいのいいの。どうせならとびっきり痛いのでもいいんだよ。ちょっとは懲りて大人しくなりゃいいのさ。
今は手が離せないから、後で取りに行かせてもらうよ。パンも差しいれてあげるから楽しみにしてな」

「やった！じゃあさっきの干しブドウのパンをお願いします」

「本当、しっかりしてるよ。あんた」

苦笑するおばさんにわたしは笑って誤魔化す。日本人の必殺技炸裂だ。
店の奥に戻ったおばさんを見送ってわたしは家へ歩きだす。
すると、数歩も先で声を掛けられる。また薬の催促だろうとわたしは声の元を辿って、バレリーを見つけた。

「ムーン、酔い覚ましの薬が欲しいんだけど、在庫まだある？」

「あれ、バレリー。酔い覚ましの薬って……この間１０個出したのに？」

「うちで酔い潰れる人増えちゃったのよ！ムーンの薬があるってバレて」

村一番の美少女と名高いバレリーは口を尖らせて言う。金色の髪の毛を緩くウェーブさせて、それを頭の高い所で一つに括っている。肩に流れる髪の毛の艶がこれでもかと光を浴びて輝いているのが少し眩しい。ぱっちりとした目と、通った鼻筋。小さめの口から紡がれる声は心地よい。

彼女の家は村で唯一の酒場を経営している。

そこに美少女であるバレリーを見ようと村の男が群がって、酒を飲むものだから潰れて困ると相談されて、酔い覚ましを彼女に渡した。たぶん、そうなるだろうと思って少し多めに。

それがこの短時間でなくなるとはさすがに予想してなかったけど。

「う～ん……酔い止めならあるんだけど」

「それって酒を飲む前に飲まなきゃいけないやつでしょ？

そんなの殊勝に飲む飲んだくれなんかいないわよ」

一見して美少女なのに、口が悪い。

この小さい村の中では、気心知れている人としか知り合わないからなのだろうけど。その顔でその言葉づかいはちょっと夢を壊すと思う。幼馴染であるわたしにも分け隔てなく、ちょっと口の悪い言葉遣い。

一応客商売だし、直した方がいいのではないかとも思うのだが、それを指摘すれば十倍百倍で小言が返ってくるので言わないけれど。

「今日はもう薬草摘み終わっちゃったから……。早くて明日になると思うけど」

「じゃそれでいいわ。出来るだけ多くお願い」

「わかった。用意しとく」

「悪いわね。……たく、酔い覚ましを飲むと次の日に全く響かないんですって。

だから浴びるように飲んじゃって、潰れるのよ！それの面倒を見るわたしの身にもなってほしいわ。

そう言えば村長の所の子がムーンのとこに行ったってよ。よろしくって伝言頼まれたわ」

「あ～……、アクチノ？また来てんだ……」

わたしは表情筋を動かして笑う。酷くいびつな笑みだろうに、バレリーは面白そうに見るだけだ。

「あの子、もうすぐ街の学校に通うんだってよ。街には生活にゆとりのある人用の教育機関があって、そこに入学するって村長が騒いでたけど。

……で、あの子の学力はどうなの？」

「アクチノは、……そうだなあ。飲み込みは速いんだけど興味のないことはやらない主義って感じ？

良くも悪くも、優秀なのが困りもの」

「つまり、やる気がある時は優秀で。やる気がない時はさぼることに優秀ってことね」

興味が無さそうにしているバレリーも、少し心配しているようだ。

街に居る金持ちが通う学校。と聞くとやはりイメージは良くない。ましてや、アクチノは貧しい村の村長の孫という立場である。歓迎されるとは考えにくい。

アクチノは村長の一人息子で、将来はこの村を継ぐ立場にいる。だから村長も少しでも教育を、と街の学校へ通わせることにしたのだろう。

活発で物怖じしない少年だ。実年齢はそれほど離れている訳ではないんだけれど、精神的には果てしなく遠く感じ。おばあちゃんと孫の域に達している。

だから、なんとなくそれ相応の対応をしていたら不思議と懐かれたようで。毎日のようにわたしの家に入り浸っている。嫌いではないのだけれど、薬に興味があるようでわたしの部屋の薬草類を毎日食い入るように見ては質問を繰り返してくるので仕事がはかどらない時があるのが困る。

「入学試験もあるみたい。村長はあんまり心配してないけど。くれぐれもよろしくって伝言だよ」

「うぅ、アクチノ計算嫌いなんだよね……」

学校の入学試験といえば簡単な計算と文字の書きとりぐらいなのだが、それでも子供にはかなりハードルが高いらしい。

まあ、大人でも満足に文字を書けないのだから仕方ないのだけれど。

「ふふ、頑張りなさいよ。あんまりムーン先生を独占しとくと悪いわね。

それじゃ、酔い覚ましの薬お願いしたからね」

「わかった。じゃあ明日ね」

バレリーと別れてわたしは家に向かう。

と言ってもそこまで距離があるわけじゃない。だが、アクチノが

もう居座っているのだと思うと少し足取りが重くなる。嫌いじゃないんだけど！でも仕事が捗らない！！

両親と一緒に住んでいる家は、大きくなく小さくなく。家の隣に大きな木が立っていて意外とお気に入りなのだ。

両親の部屋とわたしの部屋と。それとリビングの簡素な家で、トイレはあるけど風呂は無い。というか、風呂という習慣がない。夏であれば水浴びで冬ならば温めたお湯で体を拭く程度。元日本人には非常に辛いが、しかし17年も生きていると諦めるし慣れる。

木を彫って作られた扉を開ける。建てつけが良い扉はゆっくりと静かに開く。

「おや、お帰り。ムーン。薬草は摘んできたのかい？」

リビングでは父が母とお茶を優雅に飲んでいる。午後のティータイムという奴だ。

紅茶もどきのいい香りが部屋に広がっている。

「お父さん、紅茶。また勝手に使ったのね？」

「いやあ、お父さんはこれの魅力にメロメロさ」

ちっとも悪いと思っていない父はへらりと笑って一口すする。別にわたしもそこまで怒るものでもない。何故なら、その辺に生えている葉っぱを干して炒って作った、原価タダの代物だ。

「アクチノくん来てるわよ」

「うん。帰りにバレリーと話してて、聞いた」

母も一緒に座って紅茶を飲んでいる。共犯ですねわかります。
アクチノがここに居ないってことは、彼はわたしの部屋にいるのだろう。あそこは結構危険な薬草が保管してあったりするので簡単に人を入れては欲しくないのだが。その辺を心得ているアクチノは余計なものには一切触れない。そこは信頼している。

さて、一見すると、昼も夜もなく働かなければいけないような貧しい村であるが、実は、昼からティータイムをしばく程度に余裕があるのだ。

その理由は勿論、わたしが産まれ持ったチートとも言える知識のお陰だ。

とりあえず記憶のまま、動物たちの糞や、腐葉土を撒いてみたり色々と試みた。芳しくない結果の年もあったが、鑑定のお陰でどこが悪いのか見抜けるため僅か5年程度で農業の事を覚え始めた。
全てを理解している訳ではないが、それでも貧しい村から普通の村になる程度までは豊作になったので良しとしよう。植物栄養剤も薬で作れるし、体に毒の無い殺虫剤も作れる。しかもコストはかからない！

ふくよかに実った野菜は結構な値段で取引されるのだ。
「手間暇かけてここまで立派なものを作っているので数は少ないんです」と言えば、相手も納得する。卸す先は幾重にも細かく分けられていて、まさか村にそこまで収入があるとは思われない。よく調べれば分かるのだが、そこまで調べるような暇な人はいないだろう。

浮いた益も、しかしこの村は隠している。

「そういえば、勇者さまの一人がいよいよ魔族の国に向かうって話だぞ」

「……へえ、そうなんだ」

思い出したように言う父に、わたしはおざなりな返事しか返さなかった。

それを困ったように笑って父は紅茶を啜る。母も同じような表情だが、どうにも愛想のよい態度は取れそうにない。もう１０年近く経っているというのに、このザマとは自分でも情けない。

「アクチノ待ってるから。部屋に行くね」

籠に詰め込んだ葉を乱暴に引っ掴んで、わたしはその場から逃げた。

【3】

［3］

わたしと共に歳を取った古めかしい扉には”ムーンの部屋　無断立ち入り禁止”とでかでかと文字で書かれている。わたしが書いたものだが、幼い頃に練習として書いたそれは微妙にいびつで読み辛い。でもなかなか書き直す気にならないのだ。

書いて貼ったとしても、両親が文字を読めないので意味がないっていうのもある。

少し立てつけが悪いのだけれど、外して付け直すのは中の薬的に危険がいっぱいなので遠慮している。だから、開けるのに少しコツがいる。

一度持ち上げるようにしてから取っ手を引かないと開かない不思議な扉だ。

「お帰りなさい！先生！！」

案の定、扉の奥に鎮座している唯一人が座れる寝台の上に、アクチノが居た。周りはすりつぶした葉や、これから納品する薬が散乱していて、とても年頃の女性の部屋とは思えない。

自分で言うのもなんだけど。

「アクチノ……部屋はダメだって言ったじゃない。危ないんだってば」

「大丈夫ですよ。勝手に触ったりはしないです。ちょっと見てるだ

けですから！」

「……はぁ」

この汚い部屋を、たとえ子供のアクチノにでも見せる事には未だに抵抗がある。

わたしも精神的に老いたとはいえ、女である。

そこのところを理解出来る年齢ではないのだろうアクチノは、まるでこの部屋を秘密基地の如く利用する。非情に恥ずかしい。

危ないと遠まわしに、何度言ってもアクチノは同じ事を繰り返すだけでわたしの部屋に入ることを止めない。というよりは薬に興味深々な様で、色々と薬を見渡している。たぶん鑑定を使っているのだろうけど、彼の知識じゃどこまで分かのか。原料までは分からないだろうけど。

アクチノの知識欲は、嫌いではない。わたしが居なくなった村で薬の知識を有する人は必要だと思う。だから、彼が薬を勉強するのは否定はしないのだが、しかしまだ彼には早いと思う。

本当は、彼がもう少し大きくなったら本格的に薬の勉強を始めようと思っていた。

わたしは鑑定のお陰で分かっている薬の知識を彼にどこまで教えられるか不安ではあるが、やれるだけはやろうと思っている。

もちろん、アクチノ本人が別の道を見つけることもあるだろう。村は彼に薬の道を望むだろうけど、まだ幼い彼が、薬に縛られることは無い。

村長にその事を伝えていたから、大切な孫であるアクチノを街の学校に入学させることにしてくれた。それはわたしに教わらなくとも最低限の知識を身につけて来いという村長の気遣いだろう。そして、それでも薬の道を望んだら戻って来いという親心でもある。

だから、わたしも彼が学校を卒業して村に戻ってきたら、と思っ

ている。

肝心の本人がどうも納得していないようだけど。

「先生の授業、計算問題ばっかりなんだもん。おれは薬の事を知りたいんです」

「……だから、薬の事は学校を卒業してからって言ったじゃない。今からじゃちょっと早すぎるよ。

もう少し学校で色々学んで、思考が柔らかくなったら本格的に教えてあげるから」

「それじゃ遅いです！」

「アクチノは若いんだし。焦る必要ないと思うけど？

もちろんわたしだってアクチノが戻ってくるまで生きてると思うけど？平均寿命的に」

「そうじゃなくて！だって、先生……」

アクチノは言葉を切って俯く。私の顔色を窺うように上目で覗いて、きゅっと眉を顰める。

彼は我がままではない。活発で、少し向こう見ずな所があるだけで素直でいい子だ。だから嘘が付けない。

いい意味でも悪い意味でも。

わたしは手に持っていた葉の大量に入った籠を部屋の端に置く。籠は、他の大量に積まれたそれに、ものの見事に溶け込んだ。こうして部屋が汚くなるのは分かっているのだけど。

そのままそっとアクチノの横に腰を下ろす。ぎっ、と重い音を立

てて寝台はわたしの体を受け止めた。
隣にいるアクチノは俯いたままじっと耐えている。わたしは彼の顔を覗き込んだ。

「……アクチノは、わたしが街に行くと思ってる？」

「……はい。
先生の薬は、あんまり分かりませんけど、でも、街でも十分通用すると思うんです。こんな村で住んでいる必要なんかないぐらい、優秀なんだって思うんです。だからいつか街に行ってしまうんじゃないかって……」

アクチノの張りのある声が萎んでいく。それにわたしは苦笑するしかない。
わたしは、絶対に村からは出るつもりないのに。

しかし、若いアクチノは知らないのだ。村長も、アクチノの父も、この子には教えていないのだろう。
確かに、言いにくい内容だと思うし。

「わたしはね、絶対に村から出ては行かないよ。
何があってもこの土地から自分から出て行くことは　絶対に無いって約束できる」

「……なんでですか？薬が作れる先生は街でたくさんのお金を稼げます」

「……アクチノは、勇者制度って知ってる？」

「確か……、先天性属性が複数ある人とかを集めて魔族と戦う強い

人を確保するってヤツですよね？
　でも、そんな人そんなに産まれないし、大概貴族の間で産まれるって聞きました」

「そう。その制度。
　先天性属性は基本一つだけど、たまに複数持ってる人が産まれるの。それは遺伝性があるらしくて貴族に多いんだけど、たまに平民にも産まれるのよ。
　そういう人は否応なく王都に連れて行かれちゃうんだけどね、その子が産まれた村や街は税の免除を受けられるんだよ」

「……初めて聞きます」

「そりゃそうでしょうね。あまり外聞良くないし。要はその勇者候補の子の生活する場所を奪うってことよ。村や街は税の免除という利点があるから、その勇者候補を追い出す。だから戻る場所を奪われて、勇者候補の心残りを奪うってわけ。お前には戻る場所なんかないんだって言われちゃうかもね。
　そこで完璧な教育を施されて、勇者になって魔族と戦うのよ」

「……」

　関連が見えない話でも、アクチノはじっと聞き入る。こうしていると彼が優秀なのだと分かる。彼の中で必死に理解しているのだろう。
　わたしは彼から視線を逸らして、一度息を大きく吸う。
　正直、この話はまだわたしの中では昇華出来ていない。全然蟠りが残りまくっている。苦笑してもう一度アクチノを見た。

「昔、この村で先天性属性を3つも持ってた子が居たの」

「み、みっつも？」

「そう。それはやっぱり珍しいことで、お偉い貴族さんから直々に王都へ来るよう要請があった。

村長さんも、その子の両親も納得できなかった。

その子はわたしの幼馴染だったんだよ。わたしより1つ年上だったけど、お姉さんの気分でいたんだよね。体も細いし村一番の非力で気が弱い子だったの。病弱で、すぐに風邪を引くし。かけっこもケンカもわたしの方が圧勝するほどだったのよ。

そんな子が勇者候補としてやっていけるとは思えない。でも属性3つはそれでも魅力的に映るもんなのね。

結局王家直々に命令が来て、連れて行かれちゃった」

あの時のことは、まだ覚えている。

今ではもう小さくなってしまった白いワンピースを着て、村中が惜しんだ彼らの出発を。段々と小さくなる姿に、張り裂けそうな、吐きだしてしまいそうなほど悔しかった。

「その人は……？」

「今は分からない。連絡の取りようもないし。でも、生き残ってるとは思えないんだ。だって弱かったもん。木の枝振り回すのさえ躊躇する程優しい子だったもん。

……とにかく、その子は連れて行かれちゃったの。国家権力ってやつね。

この国は、出る杭は打たれる精神なのよ」

「……って、どういう意味ですか？」

「偉い人に都合が良ければ利用されて、都合が悪けりゃどうなるか分からないってこと」

「それ、”ぶじょくざい”で捕まっちゃいますよ」

「あら、難しい言葉を知ってるのね」

わたしは今でも思っている。この国は腐ってる。

王家がどれだけ素晴らしい政策を敷いたとしても、その裏ではあの子の様に存在を利用されている子が居るのだ。見かけだけの善政だと。

その批判をするだけで侮辱罪として捕縛されるのがその証拠だ。ここは王都から離れているので、駐在さんにばれない限りは大丈夫だけど、街ではそうはいかない。アクチノは少し不安そうな表情を浮かべてわたしを見る。それに笑って答えた。

「アクチノが駐在騎士に言わなきゃ大丈夫。でもアクチノは街に行くんだから気を付けるんだよ？」

「おれはそんなこと口に出しません」

きっぱりと言い切るアクチノを見る限り、村長やアクチノの両親の教育がしっかりしているのだろうと思う。わたしだって前世の記憶がなければ王家は素晴らしい存在だ、彼らのいう事に間違いなんてないと思い込んでいただろう。

……そう思えた方が幸せだったかもしれないけれども。

「まあ、そんな感じで。目立つと何に利用されるか分からないでしょ。どこで薬の知識を得たのか根掘り葉掘り聞かれるだろうし、薬

の知識を全部提示させて、口封じに殺されることだって否定できないし。目立つのはダメなのよ。
だから、わたしはこの村から出ることは無いの。絶対」

言いきってわたしはアクチノの頭にそっと手を置く。彼は怪訝そうにわたしを見る。まだ納得してないのだろうか。

「先生は、自分の知識を広げて国全体を救おうとは思わないんですか？」

「思わないよ。わたしの出来ることはこの村のことだけ。わたしが薬を作れる事を、村のみんなは黙ってくれてる。わたしがここを出たくないって分かってるから、隠してくれてるんだよ。
その人たちを救うことがわたしの出来ることなの」

薬が作れるという事だけではない。農業革命だって、他にもいろんな平成の知識を、彼らは隠してくれている。一見貧しいふりをして黙っててくれているのを、わたしは有り難いと思う。

「……おれには分かりません」

「うん。分からないと思う。アクチノは夢がある年齢だから。でもいつか分かってくれると嬉しいな。
少なくとも、わたしが望んで、ここでひっそりと暮らしているのは覚えておいて」

暫く無言でいたアクチノは、ゆるゆると首を縦に振る。それを見てわたしは安堵の息を吐く。
少し早計だったかもしれない。彼は知識欲があるぶん野望も大きい筈だ。その彼に全てを吐露することは僅かに不安を感じる。

それを頭を振って討ち払う。アクチノを信じるしかないと自分を納得させる。

「じゃあ、入学試験の勉強をしようか」

「うげっ！」

途端に正直に表情を崩すアクチノに、わたしの不安はあっという間に影を顰めてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1986z/

目立たず、騒がず、慎ましく。

2011年12月7日02時49分発行